電波新聞 2013年9月3日 一面掲載記事

東京コイル
タイ子会社

生産性が飛躍的向上

パワーインダクタ 来年6月までに 月700万個以上へ

【チェンマイ（タイ）＝霜田前特派員】東京コイルエンジニアリングのタイ生産子会社「東京コイルエンジニア（タイランド）」（ランプーン県、佐藤秀行工場長）は、過去2年ほどかけて推進した生産自動化や工程改善の取り組みにより、生産性が飛躍的に向上している。さらに、生産品目拡充としてパワーインダクタの自動機生産を立ち上げ中で、14年6月までに月産700万個以上のパワーインダクタ生産体制を構築する計画。

佐藤　工場長

同社は、1990年にタイのランプーン県の北部工業団地に設立され、デジタルカメラのストロボ用昇圧トランスやトリガーコイルを中心に、各種コイルの生産を行う。東京コイルエンジニアリングは、DSCのストロボ用ではワールドワイドで約7割のシェアを持ち、タイ工場は同社グループのコイル、トランスのグローバル生産・供給基地として重要な役割を担っている。

同工場では、過去2年ほどかけて生産ラインの自動化と工程改善に徹底して推進した。この結果、2年前は約1千人の従業員で月600万個の生産だったのに対し、現在は約250人で同約400万個の生産を行うなど、大幅な省人化が進展している。

現地での自動化ラインの改造も行い、衛星工場のラオス工場（ビエンチャン）にも、タイ工場の自動化設備を順次、導入している。「タイ工場、ラオス工場とも自動化の取り組みがある程度完了し、省人化の体制ができ上がりつつある」（佐藤工場長）。

さらに昨年以降、タイ工場内に営業部門を立ち上げ、タイやシンガポール、マレーシアなどのASEANエリアへのローカルセールスを強化。現地でのコイルの応用設計にも取り組み、今後も順次、設計能力を強化していく方針。「現地で応用設計を行うことでVAやVEへの対応を速めていく。現地設計力を高めることでモノづくり面でもプラスとなる」（佐藤工場長）。

パワーインダクタの自動化生産は、既に1号機を導入済みで、今後は課題解決を図りながら、14年6月までに計10ラインの体制を構築する予定。パワーインダクタは、スマートフォン用の小型・大電流対応メタル系パワーインダクタと、DSCやタブレット端末、車載用などのニッケル系パワーインダクタの両輪で展開する。これにより、スマホの合頭でデジカメの成長が鈍化する中で、新たなアプリケーションの開発に注力する。